

印刷の魅力を伝え、 富山の文化を高めたい。

知と愛で刷る。

プリンティングディレクターとして、主にポスターや写真集などの印刷を手がけています。印刷物は、紙やインクひとつとっても膨大な種類があるため、その組み合わせによって仕上がりは無限に広がります。専門的な知識や経験を活かして、クリエイターの真意を最も的確に表現できる組み合わせを考えるのが、この仕事における一番の役割です。

私のキーワードは「愛」。この仕事は、彼らの思いを代弁する作業でもあるため、しっかり意見を聞いて理解を深めることが最大のポイント。かつて東京で働いていた時に出会った故亀倉雄策さん、故田中一光さんからグラフィックデザインの巨匠たちから、その大切さを教わりました。彼らの本物のデザインを見てきたからこそ、その善し悪しを見極める目を持つことができたのだと思います。

おわりに誘われて。

2007年に東京から富山に拠点を移したのはもちろん仕事のためですが、八尾のおわら風の盆もきっかけのひとつでした。作家・高橋治たかはしおさむの小説「風の盆恋歌」を読んでいたせいか、初めて見た瞬間に魅せられ、以来15年にわたって通い続けています。艶っぽくてしなやかな風情が、いいですね。

生まれも育ちも東京の私からすると、富山は豊かな自然に恵まれて、水も魚もお酒も美味しく、暮らすには言うことなしの地域です。印刷の立ち合いのために東京からクリエイターが訪れた際には、富山の旬の幸とお酒でもてなし、また来てもらえるようアピールしています。

印刷は、富山の文化。

子どもの頃、富山の売薬さんから紙風船をもらうのが楽しみでした。売薬さんが全国各地に薬を配置していた



ことを考えると、富山の印刷は、売薬のパッケージや売薬版画から発展したのではないのでしょうか。

レトロな薬のパッケージは今見ても素敵ですよ。そんなデザインにふれてきた富山のクリエイターが今、世界に通じるポスターに挑戦していると思うと、脈々と流れる印刷文化を感じます。その文化を次代へ引き継ぐには、売薬のパッケージ同様、オリジナリティに富む印刷物を作り続けることが大事だと思います。

未来をクリエイト。

「ポスターの街・とやま」に見られるように、ポスターをまちづくりに活かしているのも富山らしさですね。アートとしてのポスターには、質感や色への微細なこだわりなど、五感に訴えるものがすべて詰まっています。そういったものが街中の至る所に掲示され感性を刺激する環境は、富山市民の美意識を高めるのではないのでしょうか。

学生をはじめとする若者やクリエイターが、富山独自の文化を底上げできるように、これからも印刷の魅力を伝えていきたいと思っています。



熊倉桂三さん

この連載では、富山で活躍するさまざまな方の「アメイジング（驚くほど素敵）」な富山について掲載します。また、WEBサイトでは皆さんのアメイジングなエピソードも募集しています。
▶詳細は、「アメイジング トヤマ」で検索してください。



▲WEBサイト

熊倉桂三くまくら かづみさん
1947年東京生まれ。株式会社山田写真製版所（富山市）技術開発室長、プリンティングディレクター。全国カタログ展では日本一の経済産業大臣賞を3回受賞するなど受賞歴は多数。